

エピローグ

◆作戦から1年後

夕陽が調整され美しいグラデーションを描くようになり、カーラは丘から街を眺めるのが好きになった。

マシーナの手術の為に取っていた長期休暇が終わって、タワー警備責任者としての仕事が始まれば当分この風景は拝めないだろう。目に焼き付けるように空をながめる。

以前より気持ちりが穏やかになった気がする。

マシーナの手術が無事終わった事、

そしてヘラが最後の日までマシーナと一緒に過ごすことが出来た事。

罪の意識を背負い運命に翻弄されたが、タワーで交わしたヘラとの約束は果たす事ができた。

そして1年前のタワーの意思との遭遇。

誰にも言う事は出来ないが、あの時――

「カーラ！遅れてすまない」公園に保護課の公用車がとまって、窓からシエンが呼んだ。

カーラは少し微笑むと、小走りで助手席に乗り込む。

車はオレンジ色の丘を降りて行った。

「うん、学校の前のベンチで待ってるね。じゃあカーラも気を付けて」電話をしようと、ちようどルークも仕事を終えてきた。

髪は短くなりスーツ姿で大人びたが、何の仕事なのかは教えてくれない。きつと怪しい映像を作っているのだろう。

「カーラ少し遅れるって」

「また？もうA I車でいいのに」ルークはカバンを下ろしがっくりとしてベンチに座った。

「それカーラに言ったら駄目だよ。めっちゃ機嫌悪くなったから」

「知ってる。あと5度目とか禁句・・・」

「マジで？5度目？」マシーナが目を丸くして驚く。

「自業自得なんだ。手動免許じゃないと嫌なんだって」

二人はため息をついた。腹が鳴る。

「先にドーナッツでも食べよ？ よろしくお願いします！」マシーナはルークを拝んだ。

「いやマシーナの方がお金持ちじゃん」

「無いよ」

「なんで？」

「将来の為」

「それは無いとは言わない」

「いいの。外の世界に出るには、それなりの資金が必要なの。それに私のお金じゃない。ヘラが残したお金よ。あとはカーラの分」

「僕のは？」

「は？一緒に外に出るならいいよ」マシーナが天井を指す。

「ええ・・・外の世界かー」ルークは天井を見上げた。

「たっぷり悩んで。まだまだ時間はあるし。とりあえず食べにいきましょうよ」

二人は立ち上がり、高架下のドーナッツ店へ向かって歩き出した。

◆外の世界

灰色の空から水が降っている。雨と呼ばれた天気はここでは見られない現象だった。広大な地上で巨大な先人の装置がゆっくりと回り、その間を歩き続けている。

（Q層もR層も上層にとられた。カインの目覚めも当分先のようなだ。嵐が来る前に先人の遺産へ向かおう。）

「どこまで潜ればいい？」

（S層でいい。設備もアンドロイドも充実して分離システムがあるらしい。

そこで体制を整えばTへ向かう。）

「ダストシートから侵入できるだろうか」

（いや逆に地上ダクトを通して山脈側へ向かう。おそらく、すべてそこにたどり着く。）

「了解」

コウは大きなリュックを背負い直して山脈へ伸びるダクトを眺めた。
この先を知る者はまだいない。

コウは新しい世界への旅立ちに期待と喜びを感じR層に未練もないが、
ふと外殻で戦った仲間の事を思い出した。

「みんな元気かな」

（また会えるさ。向こうから来るよ）

「マシーナやシエンも？」

（うむ。 マシーナは確実だな。）

「うんうん。 そうだね。 楽しみだ！」

コウはモップを持ち上げると、ダクトにむかって大きく振り下ろした。

「サイバーパンク3001

路地裏のダンサー」

完